

中級後半日本語会話クラスにおけるビデオドラマ制作 活動の報告 —その効果と応用への可能性—

高橋純子

要 旨

これは、筑波大学留学生センター補講「会話4」(日本語中級後半レベル)クラスにおいて実施したビデオドラマ制作活動についての報告である。

発話には2つの種類がある。それは、1) 公の場でのスピーチなど、あらかじめ準備された発話、2) 討論や友人との日常会話など状況によって刻々と変化していく状況依存型の発話である。日本人学生との共同作業によるドラマ制作活動は、身振りや態度など非言語コミュニケーションとともに、この2つの発話能力を高めることができるであろうと考えた。さらに、このレベルの学習者の発音やイントネーションなど音声面での矯正を行うのはなかなか難しいものであるが、よい作品を創るという目的のためには、学習者は発音やイントネーションに気を配って、何度も台詞を練習するはずだ。実際、撮影中、ある場面を使い、効果的に学習者の間違いを指摘し、説明し、指導することができた。本稿では、ドラマ制作過程の観察と学習者と活動に協力してくれた日本人学生の意見・感想から何が学べるのかをさぐっていく。そして、ビデオドラマ制作活動の意図とその実際の成果、留意点、改善点について述べる。

ビデオの使い方として、1) テレビドラマなどからのモデル会話場面を見せる。2) 日本語の進歩の様子を知るため、または、習慣化されてしまっている間違いに気付くため、学習者の演じているところを撮影し見せる、という2つを併用することが効果的であろう。相手や場によって話し方を変える待遇表現を学ぶ場を提供するという点でドラマ制作は有効だと言える。

【キーワード】 中級後半学習者 あらかじめ準備された発話 状況依存型発話
日本人学生との共同作業 待遇表現

The Effects and Feasibilities of a Video Drama-Making Activity in Upper-intermediate Conversation Class

Takahashi, Junko

Abstract

This paper is a report on the effects of the introduction of a video drama-making activity in upper-intermediate class. There are two types of discourse: 1) planned discourse (designed and prepared in advance) to accomplish certain tasks, such as making a speech in public. 2) arbitrary discourse which changes depending on the situation, such as discussion or daily conversation with friends. Video drama-making activities are supposed to contribute to the development of both types of discourse, as well as non-verbal communication skills. It is sometimes difficult for teachers to have students of this level repeat sentences or phrases with the correct and appropriate accent and intonation. During the video drama-making process, however, students should be willing to practice their lines in order to produce a good film. Some important language usage mistakes were found and corrected efficiently during filming. I also suggest the effectiveness of using video in the following ways: 1) showing a montage of conversational clips. 2) showing the students themselves playing their roles, so that they can be aware of any improvement. Some regular mistakes can then be taken care of. I also discuss the feasibility of drama-making in learning usage of formal and casual Japanese, by creating more realistic situations than usual class activities.

1. 問題状況

中級後半学習者にとって、どんな会話授業が役に立つのだろうか。筆者の担当する会話4のレベルの学習者の大学における身分はまちまちである。大学院生、研究生、短期留学の学部学生、日本語・日本文化研修生などだ。それぞれの専門も多岐に渡る。当然ながら、この会話4のクラスに至るまでの日本語学習歴も多様だ。自国で独学で学んできた者、自国の大学で日本語専攻だった者、日本国内の他大学や日本語学校で学んできた者、筑波大学留学生センターで初級から、中級レベル1、2、3、と順を追って学習してきた者など様々だ。それまでの来日経験、滞在期間も、初来日から数年に及ぶ者まで見られる。共通しているのは、このレベルになると文法間違いなどは随所に見られるものの、結構早口でまとまった考えが言えることであろうか。この中には、新しい文型や語彙を覚えるよりむしろ発音、イントネーションに気をつけられれば数段上手に聞こえるであろう学習者、あるいは、量を話すことに一生懸命で、客観的に自分の話し方を観察する態度に乏しい学習者なども見られる。スピーチやディベートなど、ある程度準備可能な口頭表現活動ではよい成果を出す学習者が、日常的な会話場面では、なかなか自然な対応ができず、もどかしく感じている様子も見られる。学習者の背景によって、日常会話のような状況依存型の発話を得意とする者も、反対に苦手とする者もいる。このような学習者を対象に、日本人学生と共同で取り組むビデオドラマ制作を話す能力養成活動として導入した。

2. ビデオドラマ制作活動導入の過程

今回紹介する2000年2学期、3学期、2001年1学期の授業に先行して、1999年1学期と2000年1学期に星崎(1997)「船長からの手紙」という教室活動を拝借した。これは語彙教育を目指したもので、沈没する船の乗客リストから3名を選びだし、救命ボートに乗せ、生還させる。その後、生き残った船長が遺族に手紙を書くという活動である。筆者はこの活動に加え、沈没船から生還した4名に対しての記者会見場面を学生に演じさせ、ビデオ撮影した。これは星崎の紹介した活動には含まれていないのもである。記者会見は、うまく対応できる者あり、言葉に詰まり無言の演技に頼る者あり、それぞれの個性が見られた。一方、ある役を演じるにあたり、イントネーション、プロミネンスがうまく機能していない場面も気になった。また、公の場としてのインタビューで、敬語が適切に使えていない、使おうとしているのだが、成功しない例が多かった。ビデオドラマ制作活動を積極的に活用することで、このレベルの日本語学習者に対して、発音、イントネーション、プロミネンスなど音声面の指導を十分にすることができるのではないだろうか。相手、場によって話し方のレベルを変える待遇表現を、ドラマの中での役割と人間関係を利用して学ばせることができるのではないだろうか。特に、教室活動ではなかなか同世代の学生との自然な会話場面が作りだしにくい。どうしても発表形式やディベートなどあらかじめ準備可能な発話練習になってしまいがちだ。ドラマ制作は、必然的な会話状況を提供できるのではないかと考え導入した。

3. ビデオドラマ制作活動の狙いとその意識化

ドラマ制作には、大きく分けて二つの言語学習活動がある。それは、ひとつは制作過程で、学習者と日本人学生とが協力して、ドラマの粗筋、場面、登場人物を設定し、台詞を創作したりして、目的達成のため必然的に日本語を使うことであり、もうひとつは、台詞を覚え、演じる活動である。前者は状況依存型発話を促し、後者はあらかじめ準備できる発話の練習ということもできよう。

学習者も、また協力してくれる日本人学生も、ともすると日本語で演じることばかりに気がとられてしまう。そこで、以下の学習目標を提示し、その意識化を促した。

- 1) ビデオドラマ制作過程そのものが言語学習として機能する。ドラマの粗筋、状況、登場人物の性格などまだ目の前に出現していない事柄、経験していない事柄、話者の頭の中にだけあるアイデアを相手にわかるように説明することができるようになる。
- 2) 他の学生の意見、提案に賛成、あるいは反対の意思を示し、その理由を説明できるようになる。
- 3) シナリオ制作を通して、文脈、登場人物にあった台詞が作れるようになる。
- 4) 自分の台詞を自然に言えるように何度も練習することで発音、イントネーションなど音声面での改善をする。

4. 活動の詳細

4. 1 各学期の学習者の内訳と制作手順、その作品の概略

【2000年2学期】 75分授業9回

韓国	(8名)	
中国	(3名)	
スロベニア	(1名)	
ブラジル	(1名)	
ニュージーランド	(1名)	
日本人学生	(3名)	計17名

4つのグループを作り、日本人学生が3グループに1人ずつ入った。1つのグループは日本人学生の都合がつかず、学習者だけになった。

この期は、ビデオドラマ制作活動以外の活動も加えたため、時間的にあまり余裕がなく、ある状況と登場人物を教師側が設定し、各グループはそれぞれ、その後の展開をドラマ化するという方法をとった。状況は、「船が難破し、4名が救命ボートで無人島に漂着。20代の野球選手、持病の心臓病に苦しむ有名ホテルの料理長、ヨットで航海したことがあり、海図が読める

医者、マスコミから逃れたい売れっ子の詩人。救命ボートはかなり痛んでいる。持ってきた水は、あと2日分くらいしかない....。」というものである。登場人物は共通しているが、その後の展開はグループによって異なる。

【2000年3学期】 75分授業10回

アメリカ	(1名)	
ハンガリー	(2名)	
スロベニア	(1名)	
モンゴル	(1名)	
中国	(1名)	
韓国	(1名)	
インドネシア	(1名)	
日本人学生	(4名)	計12名

2つのグループを作った。前学期の反省から、ビデオカメラの操作と編集作業に慣れるため、始めの2～3回を短いコマーシャル制作に使った。「学生宿舎」と「人間のリサイクルショップ」というCMができあがった。

ドラマ制作には必ず、相手によって話し方のレベルを変える待遇表現を入れ込むように指示を出した。宝くじが当たった家族の関係を扱った作品と、駅の待合室で見ず知らずの男女のグループが段々仲良くなって行く過程を作品にしたものが出来上がった。この回では、教師はいくつかの話し「種」となるものを提供するにとどめた。宝くじをめぐる作品は教師の与えた選択肢を取り入れ発展させたもので、駅の待合室を場面とする作品は学生の創作によった。

【2001年1学期】 75分授業が10回

イタリア	(1名)	
オーストラリア	(1名)	
ベトナム	(2名)	
日本人学生	(4～5名)	計8～9名

この期は、他の学生6名がドラマ制作以外の活動を希望し、ドラマ制作グループとドラマ制作以外の活動グループの2つに分かれた。よってドラマ制作グループは1つ。教師からの案は与えず、始めから学習者と日本人学生たちにどんなドラマを作るか話し合わせた。大学の近くに大きなロケットの模型があり、それを背景に入れたいということから、「かぐや姫パート2」という題名で、現代にかぐや姫が再来し、文明の利器に驚き、恋をし、月に帰って行くという

作品であった。長大な脚本が出来上がり、学期中にはとうていできあがりそうもないため、見どころのみ撮影し、プロモーションビデオを制作した。作品が短くなった埋め合わせとして、ドラマ以外の活動グループの学習者が、俳優、監督をやった学習者や、協力してくれた日本人学生へインタビューをし、ワイドショー形式に演出し、ビデオ作品の一部とした。

作品の編集は、2000年2学期については教師が行ったが、その次からは学習者が、教師の助けを借りながら行った。各学期とも最終日に上映会を開き、最優秀作品賞、主演男優・女優賞などの受賞を行った。受賞者は晴れの場にふさわしい謝辞を述べるという活動も加わった。

4. 2 撮影、編集に関わる技術的側面

本格的ドラマ制作を開始した第1回目の2000年2学期には、デジタルビデオカメラが2台しか使用できず、3つのグループのうち1つは従来の8ミリビデオカメラを使用した。8ミリビデオは、編集手段がなく、時間軸に沿って撮影し、巻き戻して上のせ撮影で修正をしていくという不自由な方法であった。しかし、デジタルビデオカメラを使用したグループも初めての経験で、編集作業で実際どのようなことができるのかわからずに始めたため、やはり、時間軸に沿って撮影を進めていくという結果になってしまった。さらに悪いことには、場面の始まり、終わりには「1、2、3、スタート」「カット」など合図を入れるようにと指示したのだが、合図と同時に台詞が始まり、編集の際、切り目がうまく見つからない、などの技術的不都合が生じた。デジタルビデオカメラや編集でどんなことができるのかを知り、スムーズな撮影ができるように2回目、2000年3学期には短いコマーシャルフィルム（以下CMと呼ぶ）を撮影することとした。その結果、後に続くドラマ制作は撮影技術が一段とよくなり、よい作品が出来上がった。撮影の準備のためのコマ割りもスムーズに進むようになった。

4. 3 映像リテラシー

質の良いドラマを制作すること自体が目的ではないが、自分たちが演じ、編集したものが映像作品になっていくのを見るのは、学習者にとって大きな動機付けになる。限られた時間でより完成度の高いものに仕上げていく工夫も必要であろう。そのためのテクニックを紹介していくことも有益かもしれない。例えば、「かぐや姫パート2」制作において、泣く場面を撮影したいが泣けない、という学習者の訴えがあった。スポットで水をノートの上にとらして、次のカットを主演の顔をクローズアップで撮る時に目元に少し水をつけておけばいいではないか、とアドバイスした。このことで、学習者の演技意欲をそいだかもしれない。

CM制作は機器に慣れるという目的が第一であったため、あまり細かい指導はせず、ほとんど学生たち主導で行わせた。その結果、CMとは言っても短いドラマのような作品ができあがった。何か商品を紹介すればいいだけの課題なので、人が演じる必要もないのだが、グループ全

員が何らかの形でCMに出演していた。商品売り込むコピーも説明的でスピード感がない。CMによく見られる体言止めが使えていない、といった特徴が見られた。

私たちは、普段、CM、ドラマ、映画など様々な映像作品を見てはいるものの制作者の視点から見てはいるわけではない。素人である。制作に入る前に、実際のコマーシャルやドラマの一部を見せ、映像で何が表現できるのかに注意をむけさせる、いわゆる映像リテラシーを取り上げることが有効のようだ。いくつかモデル映像を収集し、参考にできるようにしておくことが役に立つであろう。

5 学習効果

5. 1 文法上の誤り

学習者の文法上の誤りは、助詞を始めとして、自他動詞、受け身形、使役形の動詞活用の誤りなど訂正するのにことかかない。ここでは特にドラマの状況があつてこそ正すことのできたもの、教科書の文法項目では拾い切れていないいくつかの間違ひを紹介する。

1) 「助かってよかった！」

無人島に漂着した後、救助隊が到着して喜ぶ場面で「助かってよかった！」という台詞があつた。シナリオでのチェック段階では見のがしてしまったが、ビデオに撮ってみると不自然だ。この場面では「助かった！よかった！」がふさわしい。「助かってよかった！」では臨場感がない。だれか他の人が助かったニュースを見ているのか、または過去の体験を述べているかのようである。森田（1998）の言う事態の発見の「～た！」の使い方を導入するいい機会となった。

2) 「何したの！」

夫婦喧嘩で、働かない夫を妻がなじり、夫が「うるさいっ！」と妻を押し退ける場面があつた。夫の行為に対して、妻が「何したの？」と反応した。この場合は、これから何が始まるのか、夫が何を考えているのかを問いただす意識が働き「何するの！」でなければ具合が悪い。

3) 「ぜんぜん会いたくない！」

恋人同士の喧嘩場面で、「ぜんぜん会いたくない！」という台詞を言っているが、文脈からは「もう2度と会いたくない！」「お前の顔なんか、もう2度と見たくない！」など「もう～ない」の否定の意志を表わす表現がふさわしい。「ぜんぜん～ない」との違いを学ぶいい機会になった。

5. 2 音声面で観察されたこと

録画したものはコンピュータの編集ソフトを使って容易に編集できると知り、学習者は台詞を何度でも練習するようになった。特に、2001年1学期のワイドショーでのインタビュー場面

では、インタビューを受ける女優役の学習者（イタリア）が熱心に何度も繰り返し練習した。作品として残るということが動機付けになったのであろうか。そして、編集段階ではリハーサルの過程を見ることにより進歩の様子が自分で確かめられた。

ワイドショーの司会進行役をつとめた学習者（台湾）は、音声面での成果が見られた。一般的に司会の使用する日本語のイントネーションは日常会話の中のものよりかなりメリハリが効いているせいではないかと思われる。「では、次に〇〇さんにお話しをうかがってみましょう」など多少演技過剰気味に言って丁度よくなる。指導もしやすい役であった。

「ねえ、聞いた？今のアナウンス」の「ねえ、聞いた？」の尻上がりイントネーションが何度やってもうまくいかない学習者（中国）がいた。最終的には、他の学習者（モンゴル）がその台詞を言うようにシナリオを書き換えるということがあった。

また、「制作中は、気がつかなかったが、（できあがった作品を見て見ると）早口だったり、アクセントのせいでかなり聞き取りにくかった」という日本人学生からのコメントもあった。音声に関わる問題は、一朝一夕には改善されないようだ。少なくとも「練習すれば、よくなる」ということは体感させることができたと言えようか。

6 学習者の反応

6. 1 ドラマ制作全般について

2000年2学期に、学習者の感想を知るためアンケートを実施した。以下、ビデオドラマ制作についての質問項目である。学習者は、A（1～4）B（1～4）の計8項目の中から1つを選択し、コメント欄にも記入した。

ビデオドラマ制作に関するアンケート用紙

- A. (始め) 面白そうだったと思った。そしてやってみたら
1. 面白くて役に立った。
 2. 面白かったが、あまり役には立たなかった。
 3. どれほど面白くなかった。
 4. 大変で、役に立たなかった。
- B. (始め) つまらなさそう、めんどくさいと思った。そしてやってみたら
1. 面白くて役に立った。
 2. 面白かったが、あまり役には立たなかった。
 3. どれほど面白くなかった。
 4. 大変で、役に立たなかった。
- コメント

回収したアンケートは14名中11名で、A-1が7名、B-1が4名であった。開始時の反応で、Bの学習者が多いと感じていた筆者にとっては意外な結果であった。教師に対して好意的な回答を寄せてくれた分を差し引いたとしても、概ね肯定的な反応が返ってきた。コメントにも「いろいろな新しい言葉や表現を学んだ」「次は監督をやってみたい」などが見られた。否定的なコメントとしては「先が見えなくて無駄な時間があった」というものがあった。学習効果とは別に「日本に来たばかりで友だちがいなかったのだが、このビデオドラマ作りを通していい友だちができてうれしかった」というものがあった。

2000年3学期、2001年1学期に関しては、記述式で答えてもらった。ほとんどは好意的なものであった。共通して見られるコメントは「始めは何をどうするのかわからなかった。考えたことが本当にドラマになっていくのが信じられなかった」というものであった。効果音やBGMを入れたり、タイトル、配役のテロップを入れたりした完成作品を見るとそれまでの大変さを忘れてしまうのかもしれない。実際、期限内にシナリオができず、授業時間以外も連絡を取り合い、集まって作業をしていたようである。また、台詞を何度も練習したあげく、撮影時にマイクの電源を入れ忘れ撮り直すということもあった。

6. 2 学習者の合意と動機付け

2000年2学期は、教師が先に予定を組み、ドラマ制作を他の活動（「怖い話」を紹介するというあらかじめ準備可能なスピーチ）とともに入れた。学習者は予定に入っているから仕方がないと思っていたかもしれない。教師がドラマ制作活動の狙い（前述3）を強調し、学習者を説得した面もかなりあっただろう。日本人学習者との共同作業ということが動機付けになったかもしれない。これが気になって、アンケート（前述6. 1）を実施した。

2000年3学期に関しては、学期の始めに十分な話し合いの時間を設けたのち実施した。しかし、学生にとっては教師の発言は強い拘束になったかもしれない。2001年1学期にも、話し合いを持ったが、この学期の学習者は、はっきりと2つに分かれた。方や是非ドラマ制作をやりたいグループ4名、方やそれ以外の活動をしたいグループである。ドラマ制作をしたくないという理由は「やるのならいいものを作りたいが、今の自分のスケジュールではそれほどの時間も精神的余裕もない」というものだった。それまでの経験で、「面倒だ」「恥ずかしい」などという答えを予想していた筆者にとっては以外であった。さらに話し合いを続け、結局ドラマ制作グループと他の課題グループの2つに分けた。

1回目2000年2学期、2回目2000年3学期は、結果としてよかったわけだが、3回目2001年1学期は、学習者自身が希望しただけあり、脚本、絵コンテなど十分すぎるものができあがった。残念なのは、その脚本を実現する時間がないのが明らかだったことだ。ドラマ制作の過程は楽しいことばかりではない。意見が合わなかったり、なかなか先に進まず、無駄に時間が過ぎていくような気がする時もある。最初の動機付けがあいまいで、周りに流されて始めたりす

ると「ドラマ制作じゃないことをやりたかった」という不満がでてくるかもしれない。時間はかかるが最初の話し合いで学習者の意見をよく汲み取っておくことが大切だ。

6. 3 学習者と活動との適合性

2001年1学期にドラマ制作を積極的に希望した学習者の日本語学習歴を見てみると、母国の大学での日本語教育を長く受けており、学部生であり、日本語専攻が4名中3名であった。日本滞在も、もう1つのグループの学生に比べると長い。ドラマ制作活動は日本語力だけでなく、文化的背景知識なども必要とする。今回はまだはっきりしたことが言えるほど資料がないが、学習者の背景、適性と課題との関係をさぐっていくことが必要であろう。

学習者の大学での身分も考慮すべき事柄である。理数系の学習者や大学院入試を控えた学習者などの多い学期では、6. 2で紹介したように「やるのならいいものを作りたいが、今の自分のスケジュールではそれほどの時間も精神的余裕もない」と考える学習者がいるかもしれない。その場合は控えた方がいいかもしれないだろう。

6. 4 ビデオドラマ制作活動の狙いとその意識化の効果

上記3であげた本活動の狙いを学習者に意識させるためと出席確認もかねて毎回以下のような自己評価を授業の最後にしてもらった。

自己評価用紙

課題に取り組む姿勢はどうでしたか。
1) いろいろな提案をして、積極的に取り組んだ。
例えば、
2) 協力的だった。
例えば、
3) 知らない言葉や表現などを覚えた。
例えば、
4) その他
自分で自分をほめてあげることができること

残念ながら、この評価表で学習者の取り組みをモニターすることはあまりできなかった。教師は撮影時に「あ、だめっ！それ逆光だよ！」「えっ？逆光って何」のような会話を観察しているのだが、上記の評価用紙からはたいした情報が得られなかった。学習者は制作のための話し合いで熱くなつたすぐ後では、なかなか客観的に自分を見ることができないのかもしれない。

制作に協力してくれた日本人学生が本活動に対して以下のようなコメントを寄せてくれた。

- ア) こういう頭を使う共同作業の中で会話というのが多く発生するものなんだ、とあらためて思った。
- イ) 話し合いの中で、それぞれの文化の特色などが出てきてとても興味深いものでした。
- ウ) 留学生のあふれるアイデア、創造力には学ぶものが多かったです。いい刺激をうけました。
- エ) 今回の活動を通して、留学生と日本人学生が1つの課題に取り組むことで必然的にコミュニケーションをはからなければ、日本語を使わなければならない状況ができたことが良かったと思います。日本語の勉強だけでなく日本人と交流していくことを自然に学べたのではないのでしょうか。
- オ) 皆の創造力をかきたてる活動は皆の動機を高めたのではないかと思います。

学習者よりも参加してくれた日本人学生の方が、ドラマ制作の話し合いは学びの場という意識が高かったようである。学習者の自覚は弱いものの、制作過程での日本語学習の狙いは達成できていたのではないかと判断する。

7. 今後の課題

本活動を実施してみて、筆者がビデオドラマ制作活動の効果として興味を持ち、期待しているのは、音声面での指導とともに、文法・文型項目と運用との結びつきである。前述の「助かった！よかった！」「もう2度と会いたくないよ！」など、ある場面を疑似体験することで教室で習った文法項目が身についていくのではないだろうか。しかし、これらは筆者が意図したものではない。偶然の産物といってもよい。日常的によく使っている表現などで卑近すぎて教科書では扱われていないものなどを収集しておき、それらをうまくドラマの中に組み込ませ、意図的に教えられないものだろうか。その方法を探っていきたいと考えている。

ドラマ制作活動へのもう一つの期待は待遇表現習得の場を提供できないだろうか、というものである。敬語の使い分けを知識として学んだ後、ロールプレイをしながら敬語を学んでいくという方法が一般的であるが、実際には年齢、地位、親しさ、内、外などいろいろな要因が複雑に絡み合った人間関係の中で敬語が使われている。そのような人間関係をドラマの中に作り出すことができる。敬語だけでなく年少者への呼び掛けや若者言葉、男女言葉の使い分け、家族内での人称など知識として知っていてもなかなか実感としてわからない言い方、表現があるだろう。敬語にとどまらない広い意味での待遇表現を意識的に学ぶ場を提供できるのではないかと考えている。

あるグループは教師がしないようにと注意したにもかかわらず、一部男女の役を入れ替えてドラマを制作した。「飯、食いに行こうぜ」など知っていても使う機会のほとんどない男言葉や表現を使ってみたかったというのが理由であった。関西出身の日本人学生に習って、ドラマの中で関西弁を使ってみた学習者もいた。下手なアクセントで聞いてすぐには意味がとれなかったのであるが、「わからへん」「アホとちゃうか」など使ってみたかったとのことだ。アクセントの違いが捉えにくい学習者には、関西アクセントとの比較によって標準語アクセントに気付

かせる、ということも可能かもしれない。

最後に、どのような文化的要素をドラマに盛り込めるのかを考察することも求められるであろう。ドラマのシナリオとして、異文化コミュニケーションギャップをコミカルに描く案を出した学習者がいた。家族内での人称も文化項目に入るであろう。関東と関西の対比もしかりだ。ドラマに盛り込めそうな文化学習項目を収集、吟味していく作業も今後の課題としたい。

参考文献

- 有賀千佳子（1997）「『意識化』の手段としての映像教材」『日本語学』VOL.16 明治書院
- 大内茂男（1979）「教授メディアの機能と特性」『視聴覚教育の理論と研究』日本放送教育協会
- 高橋純子（2001）「ビデオドラマ制作活動を取り入れた会話クラス」日本語教育方法会誌 Vol.8 No.1
- 中道真木男（1997）「伝達行動の学習と自己の意識化」『日本語学』VOL.16 明治書院
- 文野峯子（1997）「視覚情報の活用」『日本語学』VOL.16 明治書院
- 星崎幸子（1997）「船長からの手紙—中級語彙指導の一試案—」『講座 日本語教育』第32分冊
早稲田大学日本語研究教育センター
- 星崎幸子（1998）「ドラマをつくる—ビデオを使った授業—」『講座 日本語教育』第32分冊
早稲田大学日本語研究教育センター
- 森田良行（1998）『日本人の発想、日本語の表現』中公新書 p.172